

吉田苞竹創刊



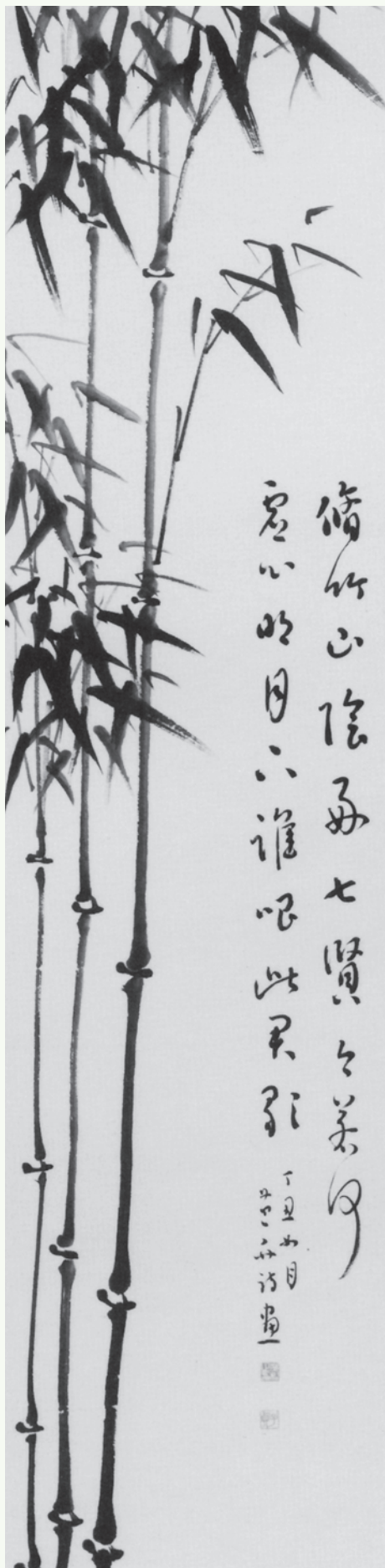
令和四年(2022年)

十月号



公益財団法人
書壇院

公益財団法人書壇院は、書道の研究、教育及び普及に関する事業を行い、書道芸術の高揚と精神の修養、人格の陶冶を図ることを目的としています。



令和四年三月十五日
令和四年十月一日
第三種郵便物認可
発行
印刷
納本

(毎月一回五日発行)

第九十五卷

第十号

第一二二五号

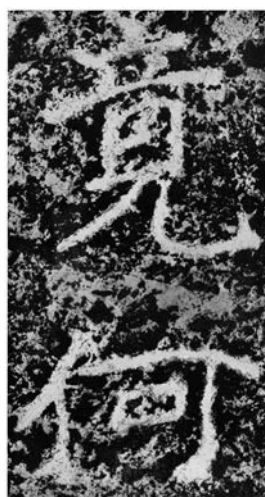
古典研究

論經書詩

(書跡名品叢刊②
P.57 | P.59
· P.75 | P.77)



齡。斯觀寧心識。



槃桓竟何爲。雲

課題

(漢字臨書規定 8頁)
半切 〓 斯觀寧心識 (五字)
半紙 〓 槃桓竟何爲 (五字)



出 会 い

平井 侘子
ひらい なおこ

六十年程前のこと、神田の書道専門書を売る店先で、偶然手にした書道誌の「書は品位、雅致、筆力の三つが大切である」との記述が目にとまりました。私は迷うことなく、そこで書のご指導をいただき励みたいと決意しました。それが『書壇』でした。

かな書を深く学びたいの一心で師を模索していた当時、この一冊との出会いが縁で書壇院の教場へ通うことになりました。書壇院の玄関前で期待感をもって一礼、そっと二階の教場へ。そこは静かでゆったりとした空気に包まれていました。お稽古中の師と先輩方の会話を聞き、作品を拝見しながら順番を待ちます。私は、その時間がとても嬉しく豊かな気持ちになれたことを覚えています。

初心者の私に多くの智慧を賜り、迷うことのないよう懇切丁寧に導いて下さった先輩の方々の慈愛に満ちた目差を忘れることはありません。そして教場では、古筆臨書の料紙における諸々を。その頃は、臨書する古筆が決まると料紙制作者に料紙を依頼します。私は、できあがった料紙を受け取る時の気高く厳肅な雰囲気が好きでした。この料紙に出会い書せる幸せを全身で感じたものです。また制作者との会話も尊く、楽しい時空を持てたことにも感謝しています。

一冊の『書壇』との出会いが新たな出発となり、掛替えのない先輩方との係りが今も私の心の中にしっかりと根付いているようです。出会いを大切にすることで、人生をより豊かに過ごせたらと切に思います。

令和四年 書 壇 十月号 目次

表紙Ⅱ書壇院蔵 吉田苞竹画

題字 集鄭道昭書

古典研究……………表 2

巻頭言……………平井 侘子 1

同人参考手本 柳 田 純一・丸 川 瑞 江 2

東 澤・晶 笛・春 淵・千 鶴 子

加 藤 玲 香・佐 藤 節 子

競 書 課 題……………横 山 菁 綯 5

漢字規定……………平 井 侘 子 6

かな規定……………岩 崎 桂 花 7

南画規定……………小 林 未 瑛・宮 下 翠 逕 8

漢字臨書規定……………星 野 静 代 9

かな臨書規定……………日 本 文……………柳 澤 朱 篁・小 川 紫 流 10

篆刻入門……………益 満 丁 盒 11

毎日書道展入賞者作品……………12

第十四回日本文の書展案内……………15

第八十九回書壇院展公募要項……………17

第一二〇回審査会員遊苑……………19

第二一二五回選書

写真・批評……………20

成績発表……………32

十一月五日締切課題予告……………47

書壇院日記……………49

バーコード券申込書……………50

応募規定・競書出品方法……………51

書画の鑑賞……………柳 澤 朱 篁 表 4

柳田純一書

— 石川啄木の歌 —

いのちなき 砂のかなしさよ
 さらさらと 握れば指の
 あひだより落つ

啄木歌
 純一書

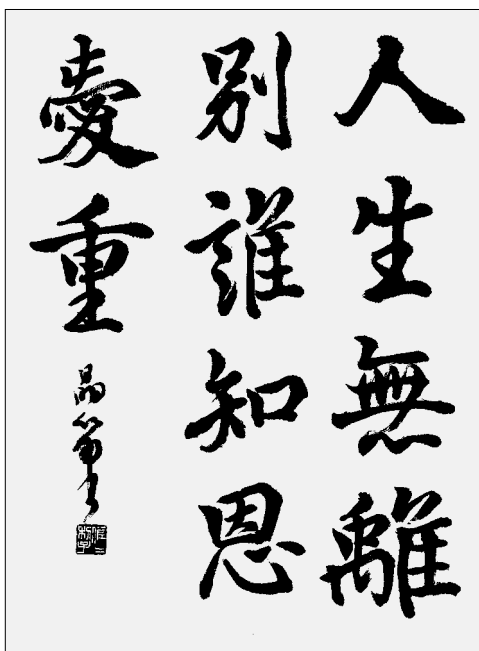
いのちなき 砂のかなしさよ さらさらと 握れば指の あひだより落つ (新編啄木歌集)

丸川瑞江書

— 顧況詩 —

故園黄葉滿青苔
 後城頭曉角哀
 此夜斷腸人不見
 起行殘月

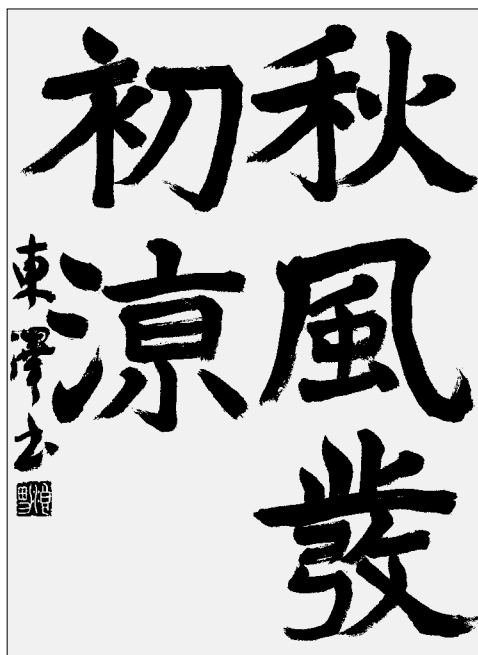
故園、黄葉、滿^{ツラン}、青苔^ニ、夢後城頭曉角哀^{シム}、此、夜斷腸人不^レ見^ヘ、起^{スレバ}、行殘月影徘徊。(唐詩選)



人生無^{ケンバ}離^ニ別^ニ誰^カ知^{ラン}恩^ニ愛^ノ重^シ

蘇軾句

佐々品竹書



秋風發^ス初涼^ニ

劉鏐句

平岡東澤書



石越^{いしこ}ゆる^遊水^水の^能まろ^万み^路を^三な^那か^可め^免つ^ニ、こ^可ころ^可かな^しし

若山牧水の歌

柴田千鶴子書



玄鶴下^ル澄空^ニ

常建句

小林春淵書

同人参考手本

2尺×6尺額用

加藤玲香書

風林落葉秋聲動
露草鳴蛩夜氣涼

風林落葉秋聲動。露草鳴蛩夜氣涼。

(新修墨場必携)

用紙 朝陽箋

筆 和筆・中鋒三号

佐藤節子書

見の近くは香久山
うろこ雲あまねき空の
月に明るき

見の近く 立つや香久山 うろこ雲 あまねき空の 月に明るき

(かな墨場辞典)

用紙 和画箋

筆 和筆・中鋒七号

—吳寛句—

十月五日締切（行書）

漢字規定

半紙縦書

上位・準上位課題

嗷嗷夜猿鳴

晚次樂郷縣

故郷杳無際

日暮且孤征

川原迷舊國

道路入邊城

野戍荒烟斷

深山古木平

如何此時恨

嗷嗷夜猿鳴

晩に樂郷縣に次る
陳子昂

故郷杳として際無し

日暮且つ孤征す

川原舊國に迷ひ

道路邊城に入る

野戍荒烟斷え

深山古木平かなり

如何せん此の時の恨

嗷嗷として夜猿鳴く

玄位・六位課題

天氣晚來秋

（天氣晚來秋なり）

夕べともなるといよいよ秋らしい。

参考手本 玄位・六位 横山青絢書

天氣晚來秋

青絢書

天—左右の払いを暢びやかに。

氣—米は中心より左側に書きます。

晚—最後の曲がりの上はあけます。

來—二画目と三画目の点は左右にあけて。

秋—のぎへんは左側を長くしましょう。

次号課題（予告） 47頁参照

十月五日締切

かな規定

半紙縦書

極位・準極位課題

あさまだき あらしの山やまの
寒さむければ もみぢの錦にしき き
ぬ人ひとぞなき

(藤原公任)

妙位・6位課題

ほのか本可尔にも 風加世は吹ふかなむ
花数、支すすき むす春保本ぼ連川れつつ
露耳にぬ毛るとも

(斎宮女御)

次号課題 (予告)

47頁参照

参考手本

妙位・6位

平井侗子書

※かな漢字相互の変換、ちらし自由。落款は○○かく+印。

あさまだき
あらしの山
の
寒ければ
もみぢの錦
き

ほのかにも
風は吹かなむ
花すすき
むすぼれつ
露にぬるとも

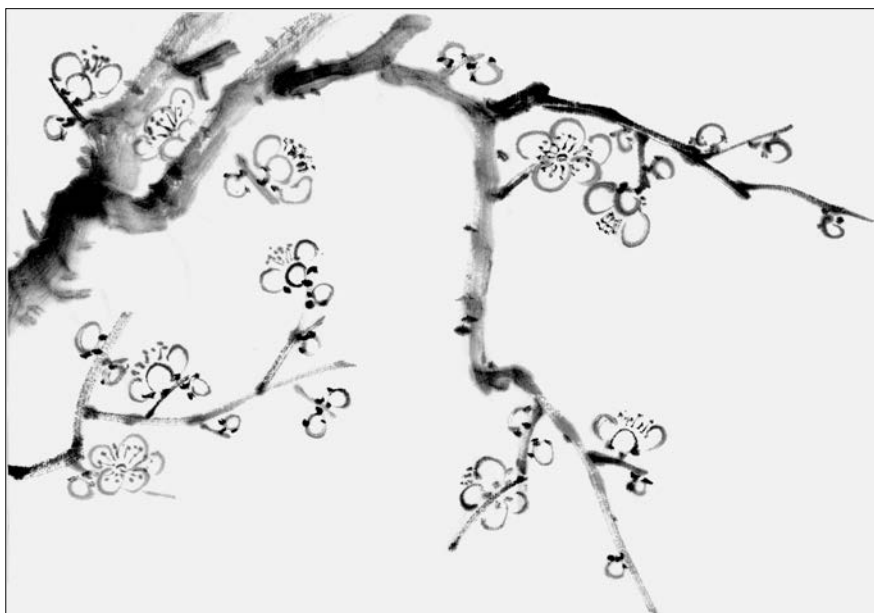


古筆で学んだ連綿法を活用しましょう。

参考手本
岩崎桂花画

梅

獨占天下春
桂花



十月五日締切

南画規定

南画初学講座（一一五）

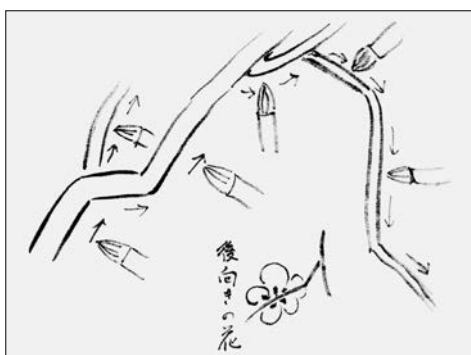
岩崎桂花

※横三十五センチ、縦二十七センチ（小画仙紙半切五分の二）の用紙を横に揮毫のこと。

今回は全体を上部に持ってきて枝が下がる図になります。まず解説のように太めの幹を途中から左上部にしつかり描きます。次に左上に少し太めの短かい枝を最初の幹の後ろを通って右下に向けて描きます。

左端の太めの幹の下からあまり濃くせず枝を出します。小枝に開き具合や手前向き後ろ向き等色々、濃淡に気をつけて花をつけます。最後に花芯と萼をつけます。

画賛は「獨占天下春」です。



参考 大久保楓紅画



次号課題（予告） 47頁参照

十月五日締切

漢字臨書規定

小画仙紙半切・半紙縦書

参考資料表紙内側

論經書詩



小林 未瑛

「論經書詩」は北魏の永平四年（五一二）の刻で鄭道昭の書です。山東省萊州市には天柱山・雲峰山・太基山などが連なり、雲峰山には鄭義下碑があります。そこから一〇〇mほど登ったところに論經書詩（縦四・五、横六m）があり、一字の大きさは一五〜一六

小林 未瑛 臨 半切参考手本（上位・六位）

斯觀寧心識

小林 未瑛

臨

cmほどの大字群、二〇行の五言古詩五〇句が巨岩の一面に刻まれています。道昭は神仙道に心酔し、神仙の道士達と雲峰山に遊んだ折、この山が神仙の棲む安息の地と考え、「經書を論ず」の詩を刻んだものとされています。その書は円筆と方筆が自在に加わり、自由闊達で格調高く、雄大で力強く、北魏の楷書中、最上の書境とされています。

鄭道昭（？〜熙平元年・五一六）河南省滎陽の人。字は傳伯、号は中岳先生。少年時代から学問を好み、また父鄭義の学識を受け高い教養を備え、しかも道家思想に深く、人々からの信望が厚かったといわれています。北魏の孝文帝に仕え、光州刺史（地方長官）となり、その後要職を経て青州刺史を歴任、さ

らに晩年は中央秘書監としてつとめ、都の洛陽にて没しています。

二二年前、萊州市での「吉田苞竹詩書碑除幕式」に参列した折、あの雲峰山に登り、鄭道昭の大きな遺産に触れた時のことは、今日になっても心を奮い起こされます。

課題は古隸の風が発揮され、円筆と方筆がその中にあり、引き締まっていながら無限の広がりを想起し、学習したいものです。

宮下翠 選臨 半紙参考手本（上位・六位）

槩桓竟
何為

宮下 翠

次号課題（予告）

47頁参照

十月五日締切

かな臨書規定

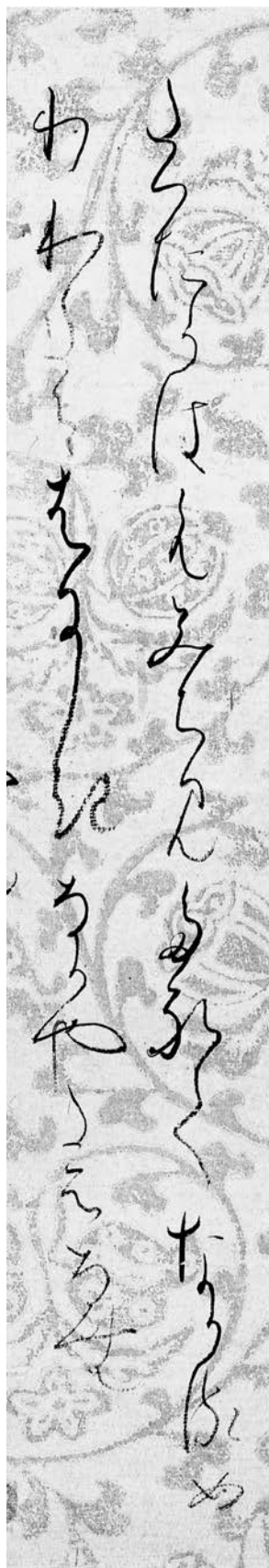
卷子本古今集

—二十二— 半紙縦半切

極位〜2位

左を半紙縦半切に臨書すること

(二玄社 日本名筆選²⁸ P.27)



多
たつたがは 無美見多礼^三
ながるめり 可流利^五
わたらばにしき 多^多者^者尔^尔起^起
なかやたえなむ 奈可多奈無^無

課題の歌は、紅葉が散り落ちて竜田川を一面に埋めて流れ行く様子を詠んだ秋歌です。連綿非連綿の巧みな交用で構成された二行が美しい佇いを見せています。一行目、細線の五字連綿で始まる表情豊かな文字が一直線上にあり安定感が生まれています。二行目は単体や多様な連綿を駆使した変化に富んだ書きぶりが鮮やか。微妙な線の揺れを見逃さぬよう丁寧にして連綿線の違いを確認しながら書きましょう。墨色の濃淡、終句えの字形に注意です。

(星野静代)

3位〜6位参考手本 星野静代臨

3位〜6位

半紙縦半切に臨書すること

多
たつたがは 无美見多礼^三
ながるめり 可流利^五
もみぢみだれて



郵代論

次号課題
(予告)
47頁参照

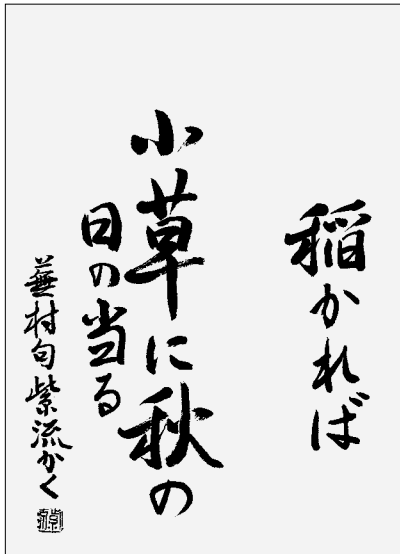
10月5日締切 日本文

①条幅規定 半切タテ 参考手本 柳澤朱篁書



道のべに 鳴けるこほろぎ 行き過ぐる 後になれり ややかに
すかに (三ヶ島霞子)

②半紙規定 タテ



参考手本

小川紫流書

稲かれば 小草に秋の 日の当る

(与謝蕪村)

③半紙随意 書体・文言自由。半紙ヨコ

予告 十一月五日締切課題

●半紙・条幅規定 手本参照
●半紙随意 半紙タテとする

・日本文の級位を書くこと。著作権に注意すること。

条幅規定 タテ 中井言玉書



陵を出し 白鷺一つ 月の面を (山本梅史)

半紙規定 ヨコ



菊田竹子書

枯山の けむり一す ぢ

(種田山頭火)

わが町の生んだ歌人
三ヶ島霞子の歌なので
身近な情景として書いた。

篆刻入門

(二三五)

益満丁ます みつ たい あん 盥あん

《応募作品アドバイス》

今月の課題は「明窗淨几」でした。凡字が疎画で、他の三文字との調和を如何に図るかが第一テーマになります。思いきり空間を設けるか、やや絞るかですが、古人は空間を取る処理が多いようです。

規定

○石春さん、字法、章法、刀法、いずれも佳です。特に淨の線の潰し方、窗の下部の弾けが見事です。凡もよく座りました。○蘭陽さん。大胆な印風です。

明窗の布置面積が広いですが、刀法がこれを救っています。下縁の朱を広く取ったことも功を奏しました。○賢さん、凡を朱文とする朱白相関印で、漢印風の作品になりました。明の右側余白がやや寂しいです。明の月をやや方形に、角（転折）をしつかり出した方が効果的だったかもしれません。

○流芳さん丁寧な作です。

机は凡の異体字ですが、説文の机は「木也。从木几聲」とし、木の名前。凡は「踞几也。

随意

篆刻課題はありませんでした。○秀剛さん、「榮枯盛衰」字配りはうまく行きました。盛の左処理に一工夫です。象形」で踞几は肘掛け、脇息を言い、のちに「つくえ」の義に用いられました。故に「つくえ」の篆書は凡に作ります。説文関係の書籍は多数ありますが、概ね漢文か中国文で書かれています。さしあたり説文の現代語訳を載せている三省堂の『全訳漢辞海』を参照されることをお勧めします。

十月五日締切課題

○規定「金石交」

○随意（または篆刻を含む）

○印は3cm以内、篆刻は原印大とします。

○51・52頁応募規定をご覧ください。

※出品票を貼ったバーコード券を必ず貼付して下さい。

規定参考 益満丁盥作



市瀬 石春



柴 蘭陽



小林 賢



堀 流芳



摹刻参考



霸陵園丞

松本 秀剛



十一月五日締切規定予告

「彰往察来」

金石交（金石の交わり）金石のように堅く、心変わりしない交際。